

平成二十四年新作名刀展の概要  
表彰式・講評・受賞作品・受賞のこと  
ば

当協会主催「平成二十四年新作名刀展」は、作品の受付期間を四月二日（月）から四日（水）までとし、四月十三日（金）に協会四階講堂において部門別に審査が行われた。審査員は「作刀の部」十一名、「刀身彫の部」八名、「彫金の部」七名であった。

出品総数は五十点で、その内訳は無鑑査が十三点（作刀の部九点、彫金の部四点）、無鑑査を除く出品数は三十七点（作刀の部二十点、刀身彫の部二点、彫金の部十五点）である。厳正な審査の結果、全部門を通じて賞者は二十二名であった。特賞に該当するものとして、作刀の部で二名、彫金の部で一名が選ばれた。特賞は、太刀・刀・脇指・薙刀・槍の部で協会の長賞に松葉一路氏、薫山賞に杉田昭二氏、彫金の部で協会の長賞に羽川安穂氏がそれぞれ選ばれた。また、優秀賞は七名（作刀の部二名、

彫金の部三名)、努力賞十名(作刀の部六名、刀身彫の部二名、彫金の部二名)であった。入選者は十七名(作刀の部八名、彫金の部九名)となっている。この表彰式は五月二十九日(火)午後一時から当協会四階講堂で行われ、はじめに総務部長から経過報告があったあと、小野会長より主催者挨拶、引き続き特賞以下の受賞者に対し賞状、賞金、副賞が授与された。今回は作刀の部の特賞受賞者に玉鋼二十キロ、優秀賞及び努力賞受賞者に同十キロが贈られた。

その入選者への証書の授与があり、各部門別に上林勇二(作刀の部)、柳村仙寿(刀身彫の部)、飯山嘉昌(彫金の部)各氏の講評が行われた。最後に受賞者を代表して松葉一路氏の答辞があり、表彰式は滞りなく無事に終了した。無鑑査及び入選以上の全作品は五月二十九日(火)から六月二十四日(日)まで刀剣博物館に展示された。

また本年、同展は埼玉県の川越市立博物館において六月三十日(土)から七月十六日(月)まで、山形県の致道

ら 博  
八 物  
月 館  
九 館  
日 に  
( お  
木 い  
ま て  
で 七  
巡 月  
回 二  
開 十  
催 一  
さ 日  
れ (土  
る )  
。 か

作刀の部

審査員講評

上林恒平

力 最初に、当協会の新法人取得にご尽  
た いたいただきました会長を始め実務に当  
れ たられました方には、本当にご苦勞さ  
し 上げたと思います。心から御礼を申  
が、出品数の少ないことは残念に思  
ま すが、出品数の少ないことは残念に思  
こ と、特に刃文について少し延べさせ  
て いたいただきます。刃文について少し延べさせ  
回 の出品刀のなかにも刃文がしつくり  
と 目に入らず、違和感を覚えるものが  
少 しありました。特に、全体として高  
い 焼刃の場合、どこかで一息つけると  
こ ろがないと、見ていても疲れまし  
い ます。若い時にこれを「目がはじく  
と いう表現で教えられた覚えがありま  
す。また、丁子足の工夫で全然違って  
く ると思えるものもありました。これ  
ら は、作った本人が一番分かってい

ことと、思いま。来年度の課題にして  
いただければと思いま。す。  
短刀、脇指の部では、剣がかなり真  
剣に議論され推す意見がありま。した。  
く上の賞高い締まりのある姿に、調  
の狭い鎬の高焼いて見事だ。つたと  
和の取れた直刃を焼いて見事だ。つたと  
思いま。す。しかし、地なかにほんの  
少し弱いと。ろが、あり、あ。と一歩が  
伸びませんと。した。剣は日本刀のな  
で大切な一分野を占めていま。す。早  
上位の賞を取り、次の飛躍に繋が。れ  
と。思。いま。す。この見事に、地  
刃の冴えた作が、ありま。した。欠点を見  
コンクールでは、どうも欠点を見  
しま。い。ます。姿の点、帽子の焼、刃文  
の構成、また刃中の変化、これらをも  
う少し工夫した。らと考。え。ると、本  
樂しみな作品だと思。いま。す。来  
待。し。ま。す。審。査。に。参。加。し。て。い。つ。も。思。う  
こと。が。あ。り。ま。す。そ。れ。は、素。直。で。見。や  
す。い。作。品。が。い。つ。も。上。位。に。考。え。て。作。品。に。反  
と。で。す。こ。れ。ら。の。点。を。考。え。て。作。品。に。反

映させていただければ幸いです。

刀身彫の部

審査員講評  
今年片山さん、上林さん共、柳村仙寿  
賞となりました。どちらも力強く彫ら  
れていて技術も増し、よかつたと思  
います。しかし、優賞に到らなかつた  
のは次のこと、気がなつたからです。  
いま、刀身彫刻は刀の姿、刃文の違  
いが、おのずと表現も違つてくる  
はずですが、偶然同じ構図が出され  
ました。その点において、刀の様さまを優  
彫りありきではないのかという思  
残りまた二本とも言えることですが、  
上げにも少し時間をかけてください。  
よく刀匠の方が彫同作として荒い仕上  
げをしていられるか、以上、刀  
身彫刻として審査を受けられる以上、  
基本的な彫りの正確さと細部にわ  
残ることなどはないよう、細部にわ  
たり神経を使うことが、とても重要で  
く、この帳面さが、刀身彫りだけな  
く、金工の分野にも挑戦できる柔軟性を

ま 抜 構 し 生  
す か 図 よ て み  
。 ない の い 技 ま  
い バ 作 術 の す  
こ ラ 品 の 。  
と ン と 向 そ  
で ス は 上 し  
完 に ` に て  
成 加 技 繫 そ  
度 え 術 が の  
が ` だ っ こ  
上 最 け て と  
が 後 で い が  
る ま な く の 表  
と で なく の 現  
思 手 刀 で 力  
い を と す と  
。



いのさ難一 いが常耳のく選賞 感こどてま出ざ  
 罫日されし梅 優に付一 と人理ばには厳 謝に出多 おした品い本 審 彫  
 な差てい樹 秀に 駆いたを本骨 解れは正 いた品難 りた四ま日 査 金  
 なしのま鉄 賞一 駕られこの表現に 金、し、 された羽な 審す 本 員 講  
 っ 暖す 肉 彫 透 座 には した 罫を 見 て みた 数 百 年 の 古 色  
 いかさ 凶も 彫 透 一 が 選 ば 形 よく、 早 春  
 ます を 感じ 刺し 形 作  
 罫に なる っ い ま す。 じ ら れ る 大 変 よ  
 が 付 いた 表現 して います。 数は 百年 いう 思  
 常一を 表現 して います。 数は 百年 いう 思  
 耳と本歌に 迫る 技巧を も っ て 一 諸 行 無  
 の人骨、金銀象 嵌、拳形に 打ち 返し た  
 く理解 した、 鎚目の 薄い 鉄地に 共 金象 嵌  
 選ばれ ました。 穂 城 州 銘 金 家 の 同 図 罫  
 賞には 羽川 安穂 さん の 一 野 晒 図 罫 一 が  
 感謝 いたす ばかりで ございます。 いた だけ だ 深  
 こに出 された 方々には いた だけ だ 深  
 ど多難 日本 の 状況 を 考 え ます と、 こ  
 ており ます が、 近年 の 災害 や 不景 気 な  
 ました。 昨年 一 昨 年 に 比 べ 少 なく な っ  
 出品 四点 の 他、 十五年 点 の 出 品 が ござい  
 ざ い ます。 本年 度 の 彫 金 の 部 は 無 鑑 査

彫金の部  
 審査員 講評  
 飯山嘉昌  
 おめでとうござい

弥 蛤 と 来 ま い 若 つ 一 ま し 今 毎 地 穂 と ま と よ ま 無  
陀 小 努 い て し 櫃 と 橋 努 考 す い 回 回 に 刈 優 の し 共 と く し た 大 優  
鑪 透 力 う お た 孔 八 透 力 し ° と は 挑 高 凶 秀 意 た に 配 置 ° 悲 秀  
地 鐔 賞 二 見 が す 大 切 羽 橋 を 効 果 的 に 配 置 し ° 鉄 地 に 杜 八 ° を  
に ー が 席 に は 山 口 石 根 ° さ ん の ー 蜻  
、 腐 ば 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
ら 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
か ば 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
し 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
と 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
小 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
透 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
を 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
加 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
え 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た  
た 選 ば れ しま し と 小 透 を 加 え た

所謂彦三写しの鐔ですが、素銅と銀の  
二色の金属で小田原覆輪を製するなど  
独自の工夫をされています。素銅がよ  
い色に揚がつておりますが、平地の肉  
取りをもう少し付け阿弥陀鏝を丁寧  
にされるとう一段とよくなると思われ  
ます。せ入選は九点で、今回は落選が  
あります。作品もありましたので、な  
お一層の研究をお願いいたします。  
切な部位です。姿<sup>かたち</sup>よく丁寧仕上  
げたいだけ。思います。特に耳  
は拵に付けた時に目立つと共に、鯉口  
を切る際に親指をかけるので丁寧な  
作業が望まれます。鑄付け薬やそ  
の鉄鐔は鑄が重要です。鑄付け薬やそ  
の方法を研究し、時間をかけて仕上げ  
ていた、伝えたいたいと思います。  
の基準はそれぞれ分野において多少  
の違いがあるようです。当協会にお  
いては「拵にかかる」という「用即美」  
を基準にしていきます。江戸時代以前  
の実用時代の刀装具を調査・研究され

て、作品を製作されるのが最善の方法  
と思います。また、画面の題材については対  
象とする人物や動物・器物等をよく  
観察され、写生をして、その特徴を表  
現していただくように思います。  
艶を鑑賞する「無限の世界に納色  
まる大きな日本独自の楽しみなど、世界中に比  
類なき日本の独自美意識がありま  
す。これら伝統が末永く継承され  
ていくことを願っています。